

五色塚古墳出土の古式土師器とその編年の位置づけ

兼 康 保 明

1. はじめに

明石と淡路島の間に横たわる明石海峡は、別名明石瀬戸ともよばれその風景の美しさは、古くから多くの旅人の心をゆり動かしてきた。この美しい海峡の地形は、六甲山地とその延長である北淡路の津名丘陵との間が陥没してできたもので、幅約4 km、船で横断すれば約20分ほどの狭い場所である。したがって、大阪湾の入口を扼する海路の重要な位置を占めている。

五色塚古墳は、明石海峡を眼前にのぞむ神戸市垂水区五色山四丁目の、海岸線に近い洪積台地上に立地している。古墳は、総長約220 m（全長197 m、隴の幅約10 m）を測る巨大な前方後円墳で、その規模は県下最大であるばかりでなく、畿内の代表的な大古墳に匹敵するものである。

こうした県下第一の規模をはこる五色塚古墳は、早くから考古学者や郷土史家などの注目するところであった。そうした人々が一度は抱く疑問に、五色塚古墳の築造年代があげられよう。

2. 五色塚古墳の年代観

五色塚古墳の築造時期については、葺石におおわれた三段築成の巨大な墳丘と、それをめぐる周隴、千壺古墳の別名にふさわしい多量の埴輪の使用などから、古墳時代を前・中・後期の三期に分けた中期——最盛期の古墳と久しく考えられていた。また、古墳時代を前期と後期の二期に大別し、前期を四区分、後期を三区分して細かく各地の古墳の変遷を追った『日本の考古学』Ⅳでは、「墳丘の規模あるいは内部構造・副葬品の内容にもっとも巨大な権力の表示がみとめられる時期、つまり五世紀前半に中心をおく」前・Ⅲ期の古墳として編年されている^①。この前・Ⅲ期は、畿内では大阪府応神天皇陵古墳、仁徳天皇陵古墳、地方では岡山県造山古墳、作山古墳などの巨大な古墳を代表例として示していることから、三期区分と対比すれば中期前半に該当しよう。

ところが昭和43年、笹倉忠雄氏によって一つの試みがなされた。笹倉氏は、五色塚古墳の墳丘実測図をもとに、上田宏範氏の計測点方法による前方後円墳の型式編年^②を適用して、その築造年代にせまろうとしたのであった。また、墳丘の形態が類似する古墳として、大阪府和泉黄金塚古墳、奈良県崇神天皇陵古墳、神功皇后陵古墳、日葉酸媛陵古墳など、『日本の考古学』で前・Ⅱ期に分類された四古墳をあげ、五色塚古墳との比較もおこなっている。こうした検討から笹倉氏は、「（五色塚古墳は）形態上から和泉黄金塚古墳・日葉酸媛陵・神功皇后陵と類似の形態であり、立地条件その他においても（三期区分の）前期末の古墳と類似している。

また上田宏範氏説の計測点方法によって測定しても、A群となって、前期的要素の強い古墳となるので、五色塚（千壺）古墳を前期末古墳と考察するものである。（一部筆者補註）」と結論づけ、従来の説よりさかのぼった四世紀末の年代観を提唱するに至ったのである^③。

笹倉説より後の五色塚古墳の築造年代観は、神戸市教育委員会による復原・整備事業の中間報

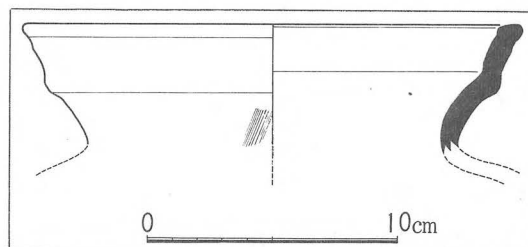
④では、「五色塚古墳の築成方法は、丘陵上に築かれた前期古墳のそれよりも、むしろ平野部に周濠をめぐらして築かれている、いわゆる中期古墳の築成方法に近いといえることができる。」としながらも、「築造年代については、一応四世紀末から五世紀初頭と考えている。」と結んでいる。また、櫃本誠一氏の「兵庫県下における前方後円墳」^⑤、『兵庫県史』における西谷真治氏^⑥なども、五色塚古墳に四世紀末から五世紀初めの時期を比定している。こうした見解は、笹倉氏と時代区分上の前期と中期について多少ニュアンスのくい違いがあるものの、その年代観は笹倉説を大幅に変更するものではない。これとは別に西谷氏は、五色塚古墳出土の盒の時期について、四世紀後半から五世紀前半までの限定された期間の古墳に副葬されることをあげており^⑦、笹倉説を遺物の面から傍証した結果となっている。

しかし、こうして決定された古墳の年代観と、各地で調査例の増加した古墳時代の集落の年代観と、はたして同じレベルで比較検討が可能かどうかについて、私は久しく疑問を抱いていた。と言うのは、前者の場合、副葬品や墳形、内部構造などが時期決定の要であるのに対して、後者は日常生活に用いられた土器を時期決定のよりどころにしているからである。ところが近年、古墳の調査方法の精密化、これまでの出土遺物の再検討によって、三期区分による前、中期の古墳から出土した土師器の様相がしだいに明らかになってきた。また、集落より出土する土師器の編年が整備されてきたことにより、古墳出土の土師器を媒介として、従来とは別な角度から古墳の相対年代を決定することが可能となってきたのである。

3. 五色塚古墳出土の土師器

五色塚古墳から出土した土師器としては、復原・整備工事に伴う調査によって後円部頂上から発見された、高杯と小型の壺の破片などがすでに知られている^⑧。しかし、ここに紹介する土師器は、それらとは別に、五色塚古墳が荒れるにまかせていた昭和25、6年頃、現在県立兵庫高校に勤務しておられる磯明男氏によって採集された埴輪片の中に混っていたものである。この土師器が私の目にとまったのは、今からおよそ10年も前のことであろうか。当時、ふとしたことから拝見した磯氏採集の資料の中に、埴輪の破片とするにはあまりにも異った形態をした遺物が混っていたことから、五色塚古墳整備工事現場事務所におられた諸氏に、いろいろと意見をうかがったりもしたようであった。だが十分な結論を得ぬまま、「土師器の口縁部か？」として観察を備忘録に記し、久しく篋底に眠っていた資料である。

この土師器は、実測図に示すように二重口縁の壺形土器で、口径の約1/8ほどの破片である。形態は、いったん外反した口頸部が外側に鈍い稜をつくり、さらに上方にむかってゆるく外反して口縁部を形作っている。また、内側にはゆるやかな段が形成されており、口縁端部は、外側に



粘土を折曲げやや肥厚している。整形は、内外面とも横ナデで仕上げているが、頸部外面の下半にわずかに縦方向の刷毛目の痕跡が認められる。土器の残り具合は良好とはいえず、内面の下半部は器壁の剝脱が著しい。色調は、明黄褐色。胎土は、3～4 mmほどの砂粒を含むが比較的良好で、焼成もよくしまっていて硬い。各部の寸法は、復原口径20 cm、頸部までの残存高4.8 cm、厚さ約9 mmを測る。

この土師器の採集地点は、磯氏の談によれば「かつて五色塚古墳の東側にあった道を登った平坦地——頂上」と記憶されている。しかし、「そこが後円部の頂上であったか、前方部の頂上であったかは、はっきりとは覚えていない。たぶん道から考えて、後円部の頂上であったように思う。」とのことであった。

復原・整備事業に伴う調査では、前方部、後円部ともに頂部は精査されている。その結果、前方部では埴輪以外の出土は現段階では報告されていない。それに対して後円部では、先にも記したように埴輪と土師器の出土が報告されている。こうしたことを考えあわせると、おそらく磯氏採集の土師器も後円部の頂上に散布していたものと推定してよいであろう。

4. 出土状況の復原

五色塚古墳出土の二重口縁をもつ壺形土器の役割を検討するため、各地の古墳から出土している類例についてみてみよう。

古墳出土の二重口縁をもつ壺形土器として著名な例は、何といても奈良県桜井茶臼山古墳の土師器である^⑨。桜井茶臼山古墳では、後円部の頂上に竪穴式石室を方形に囲んだ状態で、大型の壺形土器が多数配置されていた。この壺形土器の底部は、焼成前に穿孔されており、仮器化したものであった。そのため、出土状況や形態から円筒埴輪——とりわけ朝顔型円筒埴輪の祖型と考える説もある。こうした桜井茶臼山古墳の調査が契機となって、古墳から出土する二重口縁をもつ壺形土器が注意されるようになった。その結果現在では、北は茨城県から、南は熊本県にまでその分布がおよんでいることが明らかになっている。

これら古墳出土の二重口縁をもつ壺形土器を出土状況から大別すると、副葬品と墳丘上での儀礼に関係して埋置されたものに二分される。しかし、前者の場合は、京都府尼塚古墳、島根県松本1号墳などに例があるのみで、後者の目的をもったものが出土例の大半を占めている。

さてそれでは、墳丘上の儀礼に関係して埋置した土器についてさらに詳しくみてみよう。この場合も、A・主体部上あるいは墳頂部に供献されて残されたものと、B・くびれ部や墳丘の段上、埴裾など墳丘全体にかかわる場所に位置するものとの二者がある。桜井茶臼山古墳出土例にみられるような、底部穿孔のいわゆる茶臼山式の壺形土器のほとんどは、後者——Bに該当する。そのため小林三郎氏は、底部穿孔の壺形土器を、儀器化されて墳墓で使用されるために特別に作られた土器と考えている^⑩。たしかに小林氏の言うように底部穿孔の土器は、桜井茶臼山古墳例を代表として、大阪府御旅山古墳、同將軍山古墳、佐賀県銚子塚古墳など定式化して、埴輪的な様相を示している。それに対して前者——Aの供献土器の場合は、二重口縁をもつ壺形土器も先にみた茶臼山式の壺形土器のように、儀器として定式化していない。また、千葉県北作1号墳、同能満寺古墳で見られたように、他の器形の土器と共に供献されているようである。

五色塚古墳の場合は、埴輪が整然と墳丘を圍繞しており、桜井茶臼山古墳に見られるような、埴輪的な様相をもった定式化した壺形土器の入りこむ余地は無い。この場合、磯氏採集品や発掘によって出土した土師器は、やはり墳丘上の儀礼に伴う供献土器と考えるのが妥当であろう。ただ岡山県金蔵山古墳で見られたように、後円部頂上の埴輪の中に二重口縁をもつ壺形土器が埋置された例もあり、本資料が表面採集品であるという制約からも、旧状の復原には多少の含みをもたせておく必要があろうかと思う。

こうした土器の供献された時点とは、墳丘上——とりわけ後円部頂上といった位置から考えて、やはり葬送儀礼が行われてそう時間的なへだたりのない時期と考えられる。

5. 土器編年上の位置づけ

それでは五色塚古墳出土の二重口縁をもった壺形土器が、土器編年の中でどのような時期に置かれるのか検討を加えてみよう。

この特色ある口縁をもった壺形土器の変遷を、畿内の集落跡から出土した資料で見ると、弥生時代後期の畿内第Ⅴ様式の段階で登場し、古墳時代前・中期の庄内式、布留式の時期まで認められる。この内、弥生時代後期のものは、畿内第Ⅴ様式の中では末期に位置づけられるもので、代表例としては奈良県唐古遺跡第45号竪穴上層出土の資料⁽¹¹⁾があげられよう。県下では、尼崎市田能遺跡6Y地区第2溝出土資料⁽¹²⁾が同様な時期に該当しよう。古墳時代に入ると庄内式の時期には、奈良県纏向遺跡⁽¹³⁾、大阪府東奈良遺跡⁽¹⁴⁾などをはじめとして、各地にその分布が認められるようになる。またこの時期には、弥生時代後期以来の装飾のないものとは別に、口縁部を櫛描きの波状文や竹管円形浮文で飾る装飾性豊かなものも登場する。田中琢氏が、かつて庄内式の壺形土器の指標として例示した大阪府庄内遺跡出土の壺形土器も、後者の装飾された二重口縁をもった土器である⁽¹⁵⁾。続く布留式の時期では、奈良県纏向遺跡、同坂田寺下層遺跡、同上ノ井手遺跡、同藤原宮東外郭SD914⁽¹⁶⁾、大阪府船橋遺跡⁽¹⁷⁾、同小若江北遺跡⁽¹⁸⁾などやはり広い地域に分布が認められる。しかし、この段階になると、庄内式で見られた装飾されたものは衰退する。また、布留式も小型丸底壺や小型器台などを伴う早い段階では、従来の外反した口縁を踏襲しているが、それよりも後出的な船橋遺跡のOⅠ、OⅡ期の時期では、口縁部も直立気味になり、形態の変化が顕著になっている。

二重口縁をもつ壺形土器の終末は、布留式の小若江北遺跡と、須恵器を伴出する小若江南遺跡を比較すると、小若江南遺跡の段階ではもはや認められなくなっている。同様な傾向は、船橋遺跡でも指摘できる。このことから、陶邑古窯跡群のTK208型式の須恵器が集落に供給される時期には姿を消していたと考えられよう。

こうした二重口縁をもつ壺形土器の変遷の中に、五色塚古墳出土例をあてはめて検討してみよう。まず庄内式の時期のものと比較すると、五色塚古墳出土例の方が、口縁部の外反、内面の段、口縁端部のつくりにはシャープさが無い。また整形も、庄内式のものが器面をへうで美しく磨いて整えているのに対して、五色塚古墳出土例は、横ナデと刷毛目仕上げで、むしろ布留式のものに認められる。それでは布留式の中で類似した形態、整形のものを求めるなら、上ノ井手遺跡の井戸より出土した資料が一つの指標となろう。上ノ井手遺跡の井戸からは、上、下層の二層に分れ

て布留式土器が検出されており、共に二重口縁をもった壺形土器が含まれている。整形は、共に横ナデと刷毛目によるものであるが、形態は下層のものの方が口縁が広く外反しており、上層のものは開きがゆるく段も狭い。五色塚古墳出土例は、上層のものに類似するが、形態の細部では古相を示している。しかし、下層と比較した場合は、五色塚古墳出土例の方が明らかに新しい様相のものといえる。同様に船橋遺跡OⅠ、OⅡ期のものと比較すると、五色塚古墳出土例の方が古相を呈している。

したがって以上の検討をまとめれば、五色塚古墳出土の二重口縁をもった壺形土器は、土器編年の上から布留式の範疇に含まれるものである。ただ布留式を細分した場合、庄内式に続く古い時期のものではなく、また「初期須恵器」と呼称される五世紀代の古い須恵器を伴うものでもない。むしろその中間に位置するものである。

6. 古墳出土の土師器との比較

それでは、畿内の古墳から出土した土師器と、先に検討を加えた五色塚古墳出土例を対比し、編年的に位置づけるとどのようなになるであろうか。

まず二重口縁の壺形土器という点で、奈良県箸墓古墳、桜井茶臼山古墳出土例と比較してみよう。このうち、桜井茶臼山古墳出土例については、庄内式よりもやや新しく見ようとする見解もあるが、両者は共に庄内式の段階に位置づけられるものであり、土器、古墳の編年観は、共に五色塚古墳より先行するものである。

次に、出土した土師器の器種は異なるが、これまで五色塚古墳と前後する時期に位置づけられている古墳から出土した例と比較してみよう。例えば、『日本の考古学』Ⅳで前・Ⅱ期に編年されている、奈良県東大寺山古墳、櫛山古墳、京都府元稲荷古墳出土の土師器^⑳は、土器編年の上でどのような時期にあたるのであろうか。このうち東大寺山古墳、元稲荷古墳出土の土師器は、布留式に編年されることがしばしば引用されている。ただ布留式のどの段階に置くかについては、現在二つの見解が提示されている。まず、安達厚三・木下正史両氏は、東大寺山古墳と元稲荷古墳の土器を、先にもあげた上ノ井手遺跡の井戸下層より出土した土器とはほぼ同時期に比定している^㉑。それに対して置田雅昭氏は、元稲荷古墳出土例を布留式の比較的初期のもの、東大寺山古墳出土例を布留式盛期のものと考えている^㉒。だが置田氏の場合、布留式の細分が十分に確定していない現在、具体的な類例を示していないため、はたしてどの型式のものをさしているのか不明確さを含んでいる。一方、安達・木下両氏は、布留式の細分を試み、上ノ井手遺跡井戸下層に先行するものとしてさらに二型式の存在を想定しており、置田氏の編年観とややニュアンスの相違を見せられているように思われる。また、安達・木下両氏が類似すると見た上ノ井手遺跡井戸下層と、元稲荷古墳、東大寺山古墳出土の土器の実測図を比較すると、東大寺山古墳出土例はともかく、元稲荷古墳例は置田氏の順序と同じく、やや古相を示すのではないだろうか。さらに東大寺山古墳例にしても、上ノ井手遺跡井戸上層中にも類似したものが見られ、編年の確立までにはまだ資料の集積が必要であろう。

櫛山古墳出土の土器は、類例を示しがたいが、高杯の形態などから見れば上ノ井手遺跡井戸や船橋遺跡OⅠなどの土器よりも後出的に思われる。また石野博信氏は、纏向5式（布留式盛期）

か6式（広義の布留式の範疇に入り、この段階に須恵器が出現）に位置づけており、櫛山古墳の後方部が後に付加された可能性も含めて、同古墳の下限を示すものと考えている。したがって櫛山古墳出土の土器と東大寺山古墳出土の土器を比較した場合、東大寺山古墳の土器の方が櫛山古墳のものより先行するものと考えてよからう。

以上の結果から、前・Ⅱ期の三古墳を土師器の編年観によって見るなら、元稲荷古墳→東大寺山古墳→櫛山古墳（後方部）の順となる。これらと五色塚古墳出土の土器と比較すると、東大寺山古墳例と近い時期に位置づけられる。ただ東大寺山古墳出土の滑石製台付埴（小型丸底壺と器台）を土器に置き代えて見た場合、五色塚古墳例と併行関係にある同器種の比較では、東大寺山古墳の遺物の方が形式的に先行するものであろう。

最後に、笹倉氏が五色塚古墳の時期決定に利用した墳形の類似する古墳のうち、崇神天皇陵古墳と日葉酸媛陵古墳について検討を加えてみよう。

崇神天皇陵古墳の築造時期について石野博信氏は、隣接する山田遺跡より出土する土器²⁴のうち古式土師器が纏向4式（布留式の古い段階）を下限とすることから、山田遺跡を古墳築造前の遺跡と考え一つの時期決定のよりどころとしている。また、周湟、墳丘より纏向5式の土器の出土を記しており、これらのことから崇神天皇陵古墳の時期を、布留式——纏向5式に比定している²⁵。ただ纏向5式については、石野氏が編年の根拠とした『纏向』においても、具体的なとりあげがなされていない。しかし、纏向4式については報告書の中に整理分類されて明示されていることから、纏向5式は纏向6式の初期須恵器を伴うまでの段階として、例えば小若江北遺跡、藤原宮内裏東外郭SD912、SD914、あるいは上ノ井手遺跡井戸、船橋遺跡OIなどを含む時期と理解している。五色塚古墳出土例も石野氏の提唱する纏向編年にあてはめれば、5式の範疇に置かれるものである。しかし、纏向5式はすでにみたように細分は可能であり、また現段階での崇神天皇陵古墳関係の資料では具体性が乏しく、詳細な比較検討は困難であるといえよう。

日葉酸媛陵古墳については、土器の面から検討を加えるには資料に欠けるが、隣接するマエ塚古墳²⁶より出土した滑石製埴（小型丸底壺）は、東大寺山古墳より出土した滑石製埴に似ており、もし石製埴がほぼ同時期の土師器を模して作られたものであるなら、東大寺山古墳と同様な時期が考えられよう。このことは、マエ塚古墳の方が時期的には五色塚古墳よりも先行するものであるという可能性を含んでいる。その時期は、先に検討した崇神天皇陵古墳と五色塚古墳の比較で試みた纏向5式の範疇におさまるほどの差であろう。土器を模した石製品といえば、日葉酸媛陵古墳からも石製高杯の出土が知られているが、現在のところこれに類する土師器の例については不明確である。あるいは、今後の調査で資料が豊富になれば、類例の出土も考えられ、改めて検討の機会もあろう。したがって日葉酸媛陵古墳の時期を、隣接するマエ塚古墳とそう差のないものと理解すれば、やはり崇神天皇陵古墳に近い土器編年上の時期が求められるが、今一つ細部にわたっての明確さという点では問題を残している。

7. 結び

以上五色塚古墳で採集された一点の土師器について検討を加えてきた。一言最後に付加しておくなら、この土師器が明確な出土状況や出土地点が判らない資料であるため、それが墳丘築造あ

るいは被葬者の埋葬に近い時点のものか、追祭祀によるものであるのかが問題として残るであろう。同様に、五色塚古墳の後円部頂上から調査によって発見された土師器についても、やはり同じ点が指摘されよう。ただ後者の場合は前者と違って、調査によって明らかにされたものだけに、古墳でのどの時点で行なわれた祭祀に伴う土器が詳細な報告に大いに期待するものである。筆者が磯氏採集資料の紹介に中心を置き、調査による出土資料との対比をひかえたのもこの点にある。本資料が今後の五色塚古墳研究の一助とならんことを願う。

(昭和53年1月末日稿了、昭和55年1月末日再稿了)

<註>

- ① 西川宏・今井堯・是川長・高橋護・六車恵一・潮見浩「瀬戸内」(『日本の考古学』Ⅳ、河出書房新社、昭和41年)
- ② 上田宏範「前方後円墳における築造企画の展開」(『近畿古文化論攷』、吉川弘文館、昭和38年)
- ③ 笹倉忠雄「前期末における前方後円墳の一考察」(『仏教大学通信教育部論集』第3号、仏教大学通信教育部、昭和43年)
なお上田宏範氏も、6:2.5:2のA型式の古墳として五色塚古墳を紹介している。
上田宏範「前方後円墳」(『新版考古学講座』第1巻 通論上、雄山閣、昭和43年)
- ④ 喜谷美宜『史跡五色塚古墳環境整備事業中間報告』Ⅰ(神戸市文化財調査報告13、神戸市教育委員会、昭和45年)
- ⑤ 檀本誠一「兵庫県下における前方後円墳」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集、兵庫県社会文化協会、昭和49年)
- ⑥ 西谷真治「盛期の古墳」(『兵庫県史』第1巻、兵庫県、昭和49年)
- ⑦ 西谷真治「古墳出土の盆」(『考古学雑誌』第55巻第4号、日本考古学会、昭和45年)
- ⑧ 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化課編『史跡五色塚古墳復元・整備事業概要』(神戸市教育委員会、昭和50年)
- ⑨ 中村春寿・上田宏範『桜井茶臼山古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊、奈良県教育委員会、昭和36年)
- ⑩ 小林三郎「古墳出土の土師式土器Ⅰ」(『土師式土器集成』本編2、東京堂出版、昭和47年)
- ⑪ 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊、桑名文星堂、昭和18年)
- ⑫ 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会編『田能遺跡概報』(兵庫県社会文化協会、昭和42年)
- ⑬ 石野博信・関川尚功他『纏向』(桜井市教育委員会、昭和51年)
- ⑭ 田代克己・奥井哲秀他『東奈良 発掘調査概報Ⅰ』(東奈良遺跡調査会、昭和54年)
- ⑮ 田中琢「布留式以前」(『考古学研究』第12巻第2号、考古学研究会、昭和40年)
- ⑯ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第2号、日本

考古学会、昭和49年)

- ⑰ 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真『船橋』Ⅱ(平安学園考古クラブ、昭和37年)
- ⑱ 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』(岡山県高島遺跡調査委員会、昭和31年)
- ⑲ 註⑱に同じ。
- ⑳ 註⑮に同じ。

この点については、問題も多いが報告の都合上昭和53年1月の執筆時の見解のままとした。

- ㉑ 上田宏範「櫛山古墳」(『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊、奈良県教育委員会、昭和36年)

置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」(『考古学雑誌』第63巻第3号、日本考古学会、昭和52年)

- ㉒ 註⑮に同じ。
- ㉓ 註㉑(置田雅昭論文)に同じ。
- ㉔ 清水真一「天理市柳本町崇神陵古墳南で採集した遺物について」(『古代学研究』68、古代学研究会、昭和48年)
- ㉕ 石野博信「大和平野東南部における前期古墳群の形成過程と構成」(『横田健一先生還暦記念 日本史論叢』、横田健一先生還暦記念会、昭和51年)
- ㉖ 小島俊次『マエ塚古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第24冊、奈良県教育委員会、昭和44年)